

ティーチング・ポートフォリオ

筑波学院大学 経営情報学部 ビジネスデザイン学科

佐野 司



筑波学院大学

TSUKUBA GAKUIN UNIVERSITY

目次

教育の責任	1
1. 何を担当しているのか.....	1
2. 担当科目	1
教育の理念	2
教育の方法	2
1. LMS を使った対話的授業の構成	2
2. メディアや社会の分析的記述.....	3
3. 推測統計, 多変量解析の「ユーザー」育成	3
教育の成果 および 今後の目標.....	4
参考資料	4

教育の責任

1. 何を担当しているのか

私は学部・修士課程は臨床心理学分野の大学に在籍し、博士課程では認知・教育心理学分野の研究室に所属し研究を行っていた。主な業績は教育・認知心理学の分野のものであり、大学で担当する科目はそれらの知見がベースになっている。メディアデザインコースの中では、デザインを制作する側の視点ではなく、制作したものがどのように一般の人に受け止められるのか？を中心とした認知過程について広く講義を行っている。また、デザインや制作物への感性認知評価がどのように行われ、かつデータとして提供されるのか？という視点から、感性認知評価の手法やそのデータ分析の方法等、経験的事実に関する実証研究の方法論について教授している。

教職課程（～2019年度入学の教育課程）の中では教育心理学や教育相談といった教育心理学や臨床心理学の関与する科目について担当している。そのため、卒業研究の担当分野はメディアデザインコースの内容だけでなく、教育心理学研究に類するものも多く担当している。

筑波学院大学の開学当初から2019年度までは、1～2年生に必修である実践科目も長く担当していた。アクティブ・ラーニングの中でも、学外の社会活動へのサービスを通じて学びを得るサービス・ラーニングを担当し、特に子ども支援活動や街おこしのためのイベント運営などで活動した学生に対してのリフレクションを行っている。

また2021年度からは情報基礎A・B、情報倫理といったICT教育の初年次教育にも携わっている。文書作成ソフトや表計算ソフトの基本的な使い方や、ネットを介したコミュニケーションで要求されるモラルやリテラシーの教育を行っている。

2. 担当科目

現在（2021年度）の担当科目とその概略は以下のとおりである。

科目名	対象 学年	受講 人数※	授業 形態	必修 選択	科目区分 (カリキュラムにおける位置づけ)
ライフパンと認知心理	2-4	30	講義	選択	専門基礎・共通 (コース共通の専門科目)
視覚心理学	2-4	30	講義	選択	専門基礎・コース科目 (メディアデザインコースの専門科目)
感性認知心理学	2-4	30	講義	選択	専門基礎・コース科目 (メディアデザインコースの専門科目)
メディアデザイン演習 C1(メディア心理学研究)	3-4	10	演習	選択	専門発展・コース科目 (メディアデザインコースの専門科目)
メディアデザイン演習 C2(メディア心理学研究)	3-4	5	演習	選択	専門発展・コース科目 (メディアデザインコースの専門科目)
卒業研究	4	3	演習	選択	専門発展・コース科目
教育心理学	1	10	講義	選択	資格・教職に関する科目
教育相談	2	(若干名)	講義	選択	資格・教職に関する科目
事前事後指導	4	(若干名)	-	選択	資格・教職に関する科目
教職実践演習	4	(若干名)	演習	選択	資格・教職に関する科目

教育実習	4	(若干名)	実習	選択	資格・教職に関する科目
情報基礎 A	1	20	演習	必修	入門科目
情報基礎 B	1	20	演習	必修	入門科目
情報倫理	1	30	講義	必修	入門科目

※受講人数は過去の実績による平均受講人数

教育の理念

ディプロマポリシー（2021年度版）に則るなら、「創造的に主体的に問題を解決する能力」を伸ばす教育を提供することが自身の使命であると考えている。さらに問題発見および解決する手段として、社会科学的な実証研究の知見を学生に教え、ものの捉え方や考え方を学ばせることを目標としている。

そのため本学での教育では、あえて自身の専門分野（心理学の中でも認知心理学や教育心理学）にとらわれず、人間社会で生じる諸問題に対してデータサイエンスの視点からアプローチする考え方や技術を学生に教授している。担当する科目が実践科目（現サービス・ラーニング）や情報倫理など専門から外れた内容であったときも、同じ発想で授業を構成している。

また、ものの捉え方や考え方を教授するためには、専門家との対話のなかから思考の「型」を理解させる必要がある。そのため専門的な論述や学術的なデータを使った教育でも、教員と学生との対話のなかで専門的解釈の仕方を伝え、「模倣」させたいうで学生自身の発見したテーマに臨ませるようにしている。

さらに2020年代、すべての社会的状況で必ず要求されるであろうデータサイエンスの知識（リテラシー）や分析手法を学部生時代に確実に触れ・学ばせることは、心理学的実証研究を続けてきた自分が受け持つべき教育と考えている。

教育の方法

1. LMS を使った対話的授業の構成

講義形式の授業の中で、必ず授業に関する感想や関連する質問を記述させることを心がけている。2017年からLMSとして導入したGoogle Classroomでは、学生と教師のコメントを共有できるシステムがあり、それを活用して学生の質問や意見に対してコメントをつけるようにしている。また2020年のオンライン授業から、授業開始時にそれらのコメントを画面共有しながら返答、関連する知見についてレクチャーするなどを行っている。

学生からは自身のコメントが取り上げられること＝評価されていると捉えるようで、授業回が進むごとに記述される内容が高度になる、質問内容が適切なものになる、などの変化が伺える。講義形式の場合は非参加型授業になりがちだが、LMSでの発言を通じて教員と対話することを積極的に取り入れるようになってから各科目の学生による論述も洗練されたものに変化し、深い学びの基礎になっていることが伺える。

2. メディアや社会の分析的記述

講義内容は（伝統的な）感覚知覚・認知・発達・教育心理学等の内容になるため、レポートや課題なども学術的な内容の要約やそれを踏まえた議論になりがちである。そこで授業後の課題や参考資料には、メディア作品や官公庁が公開している資料やデータを取り上げて、直接的には関係なさそうなものから論述や考察を行わせるよう工夫している。



図 視覚心理学での課題

3. 推測統計，多変量解析の「ユーザー」育成

心理統計の授業では、一般的には統計的手法を学ぶ場合はその理論や数学的手法をまず概観する場が多い。数学の得意な学生はそこから始めても問題ないが、苦手な学生にとってはその時点で学習が頓挫してしまうことが多い。わたしの授業では「分析理論や数学的手法を学ぶこと」を学習目標とせず、「エンドユーザーとして推測統計や多変量解析ができること」を目標とした授業設計をしている。講義・演習を含めた授業計画は以下の流れとなっている。

1. 推測統計や多変量解析が使用されている論文や書籍を精読
2. 1.で使用された推測統計や多変量解析でどんなことが分析できるかの講義やガイド
3. 1.使用された推測統計や多変量解析を使えるデータの集め方の考察
4. 3.で考案された仮想データを作成し、統計解析ソフトを使った分析
5. 分析結果が仮想データから導かれる結論に結び付くか否かを検証

この方法で教授すると、数学的手法が不明瞭であっても実証研究するときの調査項目や、使用する分析手法を前提とした研究計画を作成することが可能になる。このように、出力された数値の読み方を知っている・統計解析ソフトを使った分析はできるユーザーの育成を目標としている。

教育の成果 および 今後の目標

詳細は「授業改善報告書」を参照。

教育に関する外部評価としては「2018年度実務教育優秀教員」を受賞。

参考資料

授業改善報告書（過去5年分のもの）

授業で使用した Google Classroom（講義形式の授業すべて、年度ごとに更新、部外秘）

授業で使用した Power Point（講義形式の授業すべて、部外秘）